

ご関係 1 天皇から民衆から 5 必要な組織
9 テロ準備? 10 戦争に対し 12 理性と創造 15

17年2月15日号より

(や=山田 学) [☆☆☆ご関係☆☆☆☆
功『象徴天皇「高齢譲位」の真相』(ベスト新書2017年1月)に真剣に学ぼうと、この本の初版第一刷を購入しました。その12ペの【現在の天皇と主な皇族】(敬称略)といふ図を見ると、「高松宮宣仁」と記すべきところを「三笠宮宣仁」と記してあります。「ああ、誤植でした...」ではすまされないものがあるとも、わたしは感じました。生前の高松宮宣仁親王と三笠宮崇仁親王たかひとのご関係について、以下の指摘もあるからです。]

(落合莞爾『天孫皇統になりすましたユダヤ十支族「天皇渡来人説」を全面否定する』成甲書房2016年12月・221ページより) [國體ファンドの最高管理人堀川辰吉郎の薨去により、じゅうらい辰吉郎を補佐していた立花大亀和尚がその地位を承継したものと錯覚した国際金融連合は、大亀和尚に急接近して國體ファンドの利用権を要求します。]

(同224ページより) [... 昭和五十二(一九七七)年、昭和天皇が大亀和尚を宮中出入り禁止にされました。その理由は、国際金融連合

に深入りし過ぎて、國體ファンドの運用原則を逸脱したからです。

このことで昭和天皇から叱責された大亀和尚はそのまま引き下がらず、国際金融連合の対日秘密部門と結託して皇弟三笠宮を引き込みますと、もう一人の皇弟高松宮が國體参謀を率いてこれに対抗したので皇室の内部は分裂し、その状態が平成十四(二〇〇二)年ごろまで四半世紀も続いたのです。この分裂が完全に修復されたことが、ワンワールド各部門の首脳に発信されたのは、それから半世紀が経った平成二十七(二〇一五)年の一月一日と聞いております。]

(同328～330ページより) [本稿のゲラを校正していたら、三笠宮崇仁親王殿下の薨去の知らせが入りました。

時に平成二十八年十月二十七日のことです。思わず溜息をついたわたしは、「嗚呼、これで戦後が終わったのだな」と、実感しました。

(中略)

... 米ソ冷戦構造とは、実はワンワールドの宗教部門が謀ったもので、目的の一つは米ソが結託して日本を封じ込めることにあったのです。

当時のアメリカ合衆国の実質支配者は、ワンワールドの宗教部門が支配していた「秘密結社としてのアメリカ共産党」で、占領下の日本に派遣されたニューディーラーがこれに該当します。現行憲法を含め、GHQ

の政策のほとんどは、彼らがマッカーサーの名のもとに行ったのですから、本文でも述べたように、何もかもマッカーサーのせいにするのは大間違いなのです。

その「秘密結社としてのアメリカ共産党」の意向を、戦後の日本政体を支配する官僚閣の首脳と保守政治家に伝えておられたのが実は崇仁親王だったのです。これに対し、先帝陛下と高松宮殿下ら國體系の皇族は、「競わず争わず」の皇室伝統のもとに、ただ黙っていたのですが、無為に過ごされるわけではなく、顕著な活動を自制しておられただけです。

戦後の日本人の精神を支配したのは「戦後史観」です。その内容は本稿までの拙著で繰り返し述べてきましたが、この戦後史観を主導したのは京大教授上田正昭で、背後に大徳寺の立花大亀和尚がいました。これが親亀・子亀です。

大亀和尚は國體天皇堀川辰吉郎を補佐して國體ファンドを運用していましたが、その運用権の一部奪取を図る秘密勢力すなわち米国共産党・米国金融財閥の連合体は、サンフランシスコ条約による講和後も日米安保条約により米軍を日本に駐留させて、間接占領体制を敷きました。

國體黄金の利用権を秘密勢力に狙われる立場の大亀和尚が、かれらと折衝するために頼ったのが、秘密勢力にゆかりの深い三笠宮崇仁親王です。三笠宮が秘密勢力に通じ

ていたのは、昭和天皇の勸諭でも堀川辰吉郎の要請でもなく、ワンワールドの欧州派が決めたことのように思われます。

今回の薨去を機に、三笠宮が戦後に歴史学者の看板を掲げたことと、思想界・歴史界に及ぼしたその影響がマスコミによって報ぜられていますが、「戦後史観」の淵源は実に三笠宮から発しているのです。戦後史観を流布させる中核的人物として、三笠宮が上田正昭を選んだ理由の第一は、丹波アヤタチの血筋を重んじたものと思われませんが、ともかく「三笠史観」が「上田史学」となって戦後史観の基底をなすこととなりました。

昭和天皇の手前、三笠宮に直接交渉することができない大亀和尚が、三笠宮との間を媒介するものとして上田正昭に目をつけたことから、上田正昭の「アマベ・モノノベ史観」が古代史学界を席卷したのです。その結果、國體勢力は黄金ファンドの一部を奪われ、日本国民は歴史を奪われたまま今日に至りました。]

(や) [ひろい意味の皇族や、〈國體ファンド〉や、また、「戦後史観」の淵源などについて、公開され始めてゐることは、善いことであると、わたしどもは考へます。

なほ、落合莞爾先生によるこの最新刊は、いはゆる「日ユ同祖論」(日本民族とユダヤ民族は同祖であるとする論) の、その思想的な正体、および、戦後世界金融事情からくる、そ

の論への“要請”を見破つた、画期の書である。さう、わたしどもは判断いたします。]

17.3.15より

(や) [☆☆天皇から民衆から☆☆☆☆日本の天皇と皇族の伝統と創造について、伝統を探究しそれを活した創造もすることについて、今上陛下は、文字通り、第一人者です。陛下はこれについて、真剣に〈求道〉してこられたのでないか。陛下の思想は平和志向であられるやうであり、また、実は世界金融において重要な位置にもあられる、とする説があります。さういふ陛下の個性に、日本国民の多くは、敬意をもつてゐるやうです。が、陛下の個性に実は賛同したくない、といふ「識者」も少からずゐるやうです。さまざまな議論(理屈?)により陛下の個性に抵抗を試みる方がたもゐるやうです。さういふ議論のなかに、さまざまな専門の立場からの傾聴に値する意見も少しは含まれませう。

今上陛下が日本の天皇と皇族の伝統と創造について、毎日のご活動を通して真剣に〈求道〉してこられたお姿勢こそを、皇太子殿下や秋篠宮殿下に両殿下それぞれの個性において継いでもらひたい。とくに、天皇の行動は、代行でなく、天皇ご自身が全身全霊をもつて行ふべしといふ信念を確立してをられるからこそ、体力の衰へのことを問題とせざるをえない。結果、現行法にない「高齢譲位」といふ、創造の道を、真剣に発想されたのではないで

せうか。

これは今上陛下からの全身全霊をもつてされた問題提起でございませう。

問題提起として正面から受け止めず、明治維新以降に前例がない、とか、江戸時代以前にさまざまな問題もあつた、とか、議論する「識者」の意見に、まったく聴くべきものがない、と言ふつもりはありません。が、さういふ「識者」のほとんどは、日本の天皇と皇族の伝統と創造について〈求道〉する真剣さにおいて、やはり、第一人者であられる今上陛下には、負けてゐませう。真剣さの自覚があつてこそ、密室でなくとも、短期間にて、皇室典範改正の議論は進みませう。

現実問題、天皇に女性や女系も認めないと、また、皇族に女性宮家も認めないと、日本の天皇と皇族は永続しないのではないか。天皇に女系や女性を認めたりすると、日本の天皇と皇族に他民族の王家などが浸透することがありうるのか。一方、旧皇族などから男子の養子を認めてまで、「男系男子」を守るべきなのか。

なほ、日本皇統の最深層について知りたい人は、落合秘史に学ぶべし。落合莞爾先生ご自身が落合秘史の要点について語つた DVD『活字に出来ない落合秘史3 南朝天皇・北朝天皇の機密～明治天皇すり替え極秘計画』(成甲書房) <http://www.honyaclub.com/shop/g/g18526369> を、わたしはこの3月9日に入手し拝聴しました。このDVDの収納箱に

“陛下・殿下が天覧・台覧の落合秘史
孝明天皇直系の「京都皇統」がついに封印を
解いた國體の機密！”

とあります。

さて、諸民族調和へ向け、〈『日本書紀』『古
事記』と日本皇統の意識を中心とする神道〉
といふ素朴宗教の、その伝統と創造を考へる
とき、そもそも皇室典範が政治の日本国憲法
下にある法律であつてよいのかどうか。さう
いふ想ひまで浮上してまいります。

これからの人間社会にもっとも必要なものは、
〈諸民族がどう調和できるか研究する最高機
関〉です。少し先走りますが、譲位後の明仁
陛下には、今度は、たとへば、さういふ最高
機関を、わが東京にこそ創り、育てることの
象徴となつていただけましたなら、とてもあ
りがたいことと存じます。さういふ根源の立
場から、2020TOKYO も成功させたいもので
す。

＊

上からの道について話しましたが、下からの
道はかうです。

地球表面の民衆は、資産格差の拡大といふこ
とに、どう対抗すべきか。

まづ先に、民衆おたがひの健康平和生活につ
いて、これの最高品質最低費用を追求しあふ。
民衆おたがひの総合保健 (恋愛・出産・保育
・教育・保健・看護・医療) と芸術と規範と
学問。これらの最高品質最低費用を追求しあ
ふ。まづかういふ追求があり、かういふ追求

のためにこそ、富裕層からの寄付を要請すべ
し。

そもそも資産格差の拡大といふことは、多く
は、議会制民主主義のもとにおいて合法的に
行はれてゐる。したがつて、これの解決は、
富裕層から貧困層への寄付しかありえない。
ここまでは、すでに19世紀のマルクスが、論
証してゐます。

では、そのマルクスに足りなかつたものとは、
何か。

そもそも生産の目的とは、何か。これを突き
つめると、民衆おたがひの健康平和生活、と
いふことにならざるをえません。採集・漁撈
・狩猟→林業・農業・牧畜・養殖→土木・鋳
業・工業→建築・運輸・金融・通信。ここま
で来て、今の先進国とくに日本国に残るのは、
民衆おたがひの健康平和生活の生産、すなは
ち〈最終生産〉しかありません。こここそが
今の日本国の産みの苦しみであり、これこそ
が、もうありえない「成長戦略」ならぬ、〈成
熟方針〉です。

わたしは、マルクスやエンゲルスに、深く学
びました。が、彼らに足りなかつたものにつ
いては、以下の方がたに学び続けてゐます。(説
明略)

シャカ、ガンジー、沖 正弘、山田俊郎、川
喜田二郎、庄司和晃、高橋五郎、吉本隆明、
渥美俊一、三浦つとむ、滝村隆一。

もう、欧米よりも、インドと日本の諸先達に
学ぶべし。]

(や)〔☆☆☆必要な組織☆☆☆☆〕

あけましておめでたうございます。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

＊

かの真珠湾攻撃の裏事情については、さまざ
まなことが判明してきてゐます。さういふな
か、昨年未の、安倍首相とオバマ大統領によ
る、真珠湾にての儀式は、とくにその演説の
文言は、“美しすぎる ”といふ印象をぬぐへ
ません。とはいへ、まあ、政治の形式として
は、一定の意義も、あつたのでせうか。しか
し、人間社会の健康平和化といふことは、と
ても、とても、簡単なことではありません。
米国主導の世界統治が困難となつてゐる今、
米国と露国と中国を中心に、戦争回避の外交
努力を続けるしかありません。北朝鮮国の問
題を考へるためであつた、6 개국協議の枠組
を、いはば東アジア和平会議へ格上げする、
といふ方法もあるでせうか。日本国・韓国・
北朝鮮国が、米国・露国・中国の関係を調整
できるべく、それなりに主体性を発揮できる
やうにもなりたいものです。

さて、グローバリズムに対する諸民族や諸国
家の逆襲があります。これは、人間社会にお
いて、必要な組織が、未発達だからです。な
るほど、かのタックス・ヘイブンをも含め、
一方、移民許容をも含め、グローバル経営に
よる資産増殖方法は、発達しつつあります。

これは、通信技術・金融技術・運輸技術の発達からも、加勢されてゐます。

しかし、諸民族調和への道、これを提案し、指導し、運営する組織、さういふ必要な組織が、今の人間社会において、未発達です。人間社会における、言語・呪術・宗教・哲学・科学・政治の伝統を踏へ、諸民族調和への道といふ、難問解決を創造し、提案し、指導し、運営する組織が、未発達です。経済学・物理学よりも、言語学・民族学が、重要です。

ですから、さしあたり、諸国家において、移民を制限しよう、といふ動きともなつてゐるのでせう。

たとへば、日本社会への移民受け入れの準備として、世界の諸言語のなかにおける日本語の特殊性を理解し自覚する、世界の諸民族のなかにおける日本民族の特殊性を理解し自覚する、といふことは、必須でせう。企業の貸借対照表だけを視てゐる、移民受け入れは、必ず、失敗します。]

17.6.15より

(や) [☆★☆☆テロ準備? ☆★☆☆わたしどもはいちいち、点検する余裕も意志もございませんが、わたしどもの活動を理解し支持できないといふ勢力から、時には悪意をもち、わたしどもの活動について、誤解ないし曲解しようとするものもあるのかもしれない。極端には、わたしどもを強引に「テロ準備集団」なんぞにつなげたがる悪意もあるのかもしれない。]

ません。

わたしどもは、19世紀のマルクス、エンゲルス前後からの、世界と日本のいはゆる左翼史について、かなり詳しく承知してゐる。これは事実です。

であるからこそ、社会の改善・改革・変革において、テロといふものがいかに無効であるか、理性的に結論づけてゐます。

暴力をもつて社会を変革できる、とするのは、未だ、資本制人間社会の範囲内の発想です。これでは、資本制人間社会を本格的に改善・改革・変革していくことができません。わたしどもには、「テロ準備」なんぞにかける、時間も資金も情念もございません。

社会を改善・改革・変革していく要点は、「教育」にあります。わたしは尊敬する教育学者の追悼文集に短い文章を載せてもらひました。そのわたしの文章から引用いたします。]

(『庄司和晃先生追悼 野のすみれさみしがらぬ学立てよ』編集代表・小田富英 2016年 <http://zenmenken2014.web.fc2.com> 参照・197ページより) [... 人間社会人民が、おたがひの健康平和生活を、生産しあふ。さういふ理想へ向け、学問と教育を、無から考へ直したい。ここに言ふ教育は、すべて。家庭、地域、学校における、教育。教育産業、職場教育、思想運動。ミニまたはマスの、メディアを通した、教育。などなど。]

(や) [庄司和晃先生 (1929 ~ 2015) は、「全面教育学研究会」を主宰されました。すべて

の教育を全面的に見直していく。社会の改善・改革・変革といふことは、とても簡単なことではないと、わたしどもは結論づけてゐるのです。]

17.1.16より

(や) [☆★☆☆戦争に対し☆★☆☆わたしどもは、〈脱国家〉の立場から、戦争といふものについて、考へます。今までの人間社会史における戦争の必然を理解し、これからの人間社会史において、戦争といふものから、どう解脱していきうるか。わたしどもの発想の原点は、ヨガの沖 正弘師 (1919 ~ 1985) の主著のなかにあります。師は戦中に、陸軍スパイであり、イスラム圏の工作に関与してゐました。師が戦前にヨガを学んだのは、スパイ活動のためでもありました。なほ、師の本籍は、ヒロシマです。]

(沖 正弘『生きてゐる宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』竹井出版 1985年・30ページより) [... 終戦までの私のヨガの求め方はあくまで個人的な目的のものでした。たとえば自分の心を落ち着かせるにはどうしたらよいか、自分の超能力を開発するにはどうしたらよいかなど、すべて個人的なものだったのです。

終戦を境にして私の心は百八十度変り、人類の争いに対して大反省の心が起りました。なぜ戦争が起るのだろうか、戦争をしないようにするにはどうしたらよいのだろ

うかと深く考え、そこで再びガンジー聖師の平和思想を学び直す心になりました。そして戦争の問題を考えたときに、私の気づいたことは、全人類は懺悔心（おわび心）と愛し合う心を持たなければ救われないうことでした。お互い同士がわびあうのです。兄弟でなぜ戦わなければならなかったのだろうか、とわびあう気持を持たなければ救われる道は開かれませんか。]

(や) [一方、現実問題、国家の立場として、大日本帝国はなぜ敗戦が必然であつたのか、本質論理を理解する必要もあります。すでに14年近く前に発行された、国家論の専門書から、引用いたします。]

滝村隆一『国家論大綱 第一巻 上』勁草書房2003年5月・456ページより [...] (国家) は、直接には、原初的社會 [共同体] 相互における、(戦争) の必要と必然にもとづいて、歴史始源的に生起した。...]

(同 458 ページより) [(戦争) が、社会総体の維持・発展のために必要かつ必然とされた、社会を挙げての組織的軍事活動であるとするれば、(戦争責任) とは、(戦争) の結果責任以外では、ありえない。(中略) 政治指導者の責務は、(最小の犠牲・損害で、最大の勝利) をもたらすことであり、理想は、(戦うことなく勝利すること、つまりは戦勝にひとしい国益を獲得すること) である。もちろん、そのためには、一方、軍事力の充実と、他方、積極的な政治同盟政策を推

進し、決して国際的に孤立しないこと。とくに自らがときどきの時代的覇者になりえないかぎり、ときどきの時代的覇者を(敵) に回さないことが、肝要である。]

(同 459 ページより) [... 日本国民と政治指導者による (戦争責任) の追求は、(負けるとわかっていいた戦争) ・(世界とりわけ新旧の世界的覇者を敵に回して、絶対に勝てない戦争) に、あえて突入していった、ときの政治的指導者全体に、むけられねばならない。

もちろんそれは、(国民の生命・財産を遵守する)、国家統治者としての根本責務を果たせなかった、結果としての (政治責任) の問題である。戦勝国による、(勝てば官軍) という立場からの (戦争責任) の追求・処断とは、まったく質と次元を異にしている。そしてさらに、なにゆえこの種の無能な政治的指導者が、多数輩出したかの学的・理論的追究が、必要となる。もとより軍部の暴走自体が問題なのではない。軍部の暴走を必然化させた近代天皇制国家全体の、学的・理論的解明が、必要なのである。

[この点については、「補論 特殊的国家論 第一篇」参照。]

(や) [(脱国家) の立場、および、国家の立場から、本質論を盛り上げてゆきたいものです。]

(や) [☆★理性と創造★☆☆人間社会の今における流行は、「資産増殖のための合理」です。

そのみでは一面的であると、わたしも ^{縄文}JOMON あかみいひは申し上げます。

わたしは日本列島から、(縄文のねっさん) として、(縄文と調和する理性の開拓) を提唱します。素朴な縄文人には、資産増殖のみにはとられられない、全人性があり、おそらく現代人よりもひろく深い、自然感・自然観があつた。その全人性や自然感・自然観を、無理なく無駄なく、表象化し概念化していく。さういふ新しい理性によつてこそ、人間社会の将来は、無理なく無駄なく、統一されていくのでないか。誤解なきやう申し上げますと、日本民族の縄文人のあり方には、諸民族の原始人のあり方と、共通するものがあると、考へられます。その共通性に、諸民族調和へのきつかけがあると、考へられます。

さて、戦後の日本国は、世界最大の債権国となつたが、外政などくに軍事において、米国から自立してゐないのではないか。また、日本民族伝統の道徳観も衰退してゐるのではないか。かういふ主張は、十分に根拠のあることです。

が、ならば、戦前の憲法と国家神道 (とくに軍人勅諭・教育勅語) に戻ればよい、とするのは、あまりに無思慮です。「日本国はもう一度、朝鮮半島や中国大陸などに侵略したい

のか？」と問ふより、「日本国はもう一度、敗戦したいのか？」と問ふべし。敗戦の原因は「軍部の暴走」であるとかたづけるのではなく、そもそも「軍部の暴走」を許してしまった、戦前の憲法と国家神道（とくに軍人勅諭・教育勅語）といふ体制そのものに、問題があつたのではないか。さう、厳しく問ふべし。そしてこれからの問題は、諸民族調和へ向け、縄文時代からの日本民族伝統の自然感・自然観・道徳観をそれなりにどう復原できるか。健康平和な現実認識の道徳といふものを、どう確立しうるか。また、米国から自立していく、日本国の統治（情報能力・外交・通商貿易・金融政策と必要最少限の軍事・治安警察）と行政（その他の政治）を、どう確立しうるか。かういふ新しい創造の問題、産みの苦しみです。この20万年のホモ・サピエンス史とこの2万年の日本列島史を踏へた、新しい創造の道です。]